經濟論叢

第七十八卷　第一號

農林業課税の問題……神戸正雄（1）
マックス・ウェーバーが考えていた經濟理論……出口勇藏（12）
社會政策學の理論的性格……岸本英太郎（29）
時系列回歸分析における方程式誤差と變數誤差……阿部　統（55）
山陽自由黨の組織過程……內藤正中（70）
ジェントリの社會的經濟的性格……武　暢夫（96）
アメリカにおける特別償却本質論……高寺貞男（116）
ソヴェト社會史の時代區分について……富岡　裕（134）

〔昭和三十一年七月〕

京都大學經濟學會

第七十八卷　一三四　第一號　一三四

ソヴェト社會史の時代區分について

富岡　裕

一

十月社會主義革命がうみ出したソヴェト社會は、社會主義改造という困難な任務を完成し、いま社會主義から共產主義への漸次的移行という歷史的任務を成功のうちに遂行しつつある。このソヴェト社會の發展を深く、そして全面的に研究し、ソヴェト人民のたたかいとつた歷史的な道を正しく解明するうえで必要な條件の一つは、その基本的な段階を正しく規定することである。「經濟學」教科書の出版を契機として、わが國でもソヴェト研究が急激にたかまり、その理解が急速にふかまつてきたとき、ソヴェト社會の歷史の時代區分を科學的に把握することは、とくに意味ぶかいことと思われる。

ソ同盟科學院歷史學研究所で一九四九—五一年にわたつてソ同盟歷史の時代區分の問題にかんする討論がおこなわれたとき、ソヴェト社會史の時代區分についての問題はとりあげられなかつた。ソヴェト社會の歷史の時代區分は、ソ同盟でも、「ソ同盟共產黨（ボルシェヴィキ）歷史」の中であたえられた區分をよりどころとしてそのまま用いられてきたが、註また多くの歷史家がこの區分を唯一の正しいものと考えていたようである。しかし、そこには本質的な缺陷があつた。

註、たとえば、「體育史」（體育とスポーツ出版所、一九五四年版）では、「外國干渉戰爭と國內戰爭の時期におけるソヴェトの體育」、「國民經濟復興にかんするソヴェトの體育」「國の社會的工業化をめざす闘爭の時期におけるソヴェトの體育」などの區分がみられる。また「ロシア・ソヴェト文化史概觀」（ゴリキー名稱世界文化研究所）にもおなじような區分がみられる。

二

「歴史の諸問題」誌(一九五四年第一〇號)は、イ・ベ・ベルヒンとエム・ペ・キムの「ソヴェト社會史の時代區分について」という論文を掲載した。當時すでに、社會主義の時期のソ同盟史の時代區分にかんする審議を要望する声がつよまっていたが、この論文は、この審議に基礎をおくことを目的としたものである。まことに時宜をえた問題であったから、この論文にかんするソ同盟歴史學界の活發な論爭[註]をよびおこしたのは當然であった。

註、「歴史の諸問題」誌一九五五年第四號、「ソヴェト社會史の時代區分について」編集部、を參照、

イ・ベ・ベルヒンとエム・ペ・キムは、ソヴェト社會の指導的な力としてのソ同盟共產黨の歴史の段階は、ソヴェト社會史のなかで規定された段階と有機的にむすびついてはいるが、しかし、黨史のひとつひとつの時期が、かならずそしてあらゆるばあいに、國の歴史の時期と完全に一致するものではないということを主張した。黨の發展には特有の法則性、特有の時期があると考えるのである。

ベルヒンとキムは、そのような區分の例として、「十月社會主義革命の準備期と遂行期におけるボルシェヴィキ黨」と「國の社會主義的工業化をめざす闘爭におけるボルシエヴィキ黨」の二つをあげている。

ソ同盟共產黨の歴史からみれば、「十月社會主義革命の準備期と遂行期におけるボルシェヴィキ黨」(一九一七年四月—一八年)という區分は完全に正しい。というのは、この期間に黨はプロレタリア革命の客觀的條件と革命的危機があるということから出發して、大衆を社會主義革命のために準備し、組織して、革命の政治的軍隊をつくりだし、それを武裝蜂起にたたせたのであって、十月革命の遂行は、その準備からきりはなせないからである。だが、これをソヴェト社會の時代區分に機械的に適用することは決して正しくない。なぜなら、この區分は資本主義時代と社會主義時代とのあいだの境界をとりのぞいてしまうからである。ベルヒンとキムは、十月革命をその準備期としてでなく、革命の繼續である國內戰の時期とあわせて、一つの時期に區分しなければならない、と主張した。そのさい、だからといって、十月革命の勝利をその準備期からきりはなして敍述しなければならないということには決してならないと注意している。

第二の「國の社會主義的工業化をめざす闘爭におけるボルシエヴィキ黨」(一九二六—二九年)という區分も、黨の歴史からみれば全く法則的である。それは、この期間に共產黨が國の社會主義的工業化の方針をきめ、具體的な綱領によってソヴェト人民を武裝し、その實現をめざす闘いにたたせ、「黨と勞働

者階級の努力が國の社會主義的工業化政策の勝利に導いた」[註]からである。

註、「ソ同盟共產黨（ボルシェヴィキ）歷史」二八五ページ

一九二九年に、黨は農業集團化というあたらしい任務の解決に努力を集中した。このことは、もちろん、この年までに工業化の問題が解決されてしまい、この年以後黨が工業化のために努力しなかつたとか、あるいは、一九二六—二九年に農業集團化のために闘わなかつたということをいみするものでは決してない。黨の指導の本質は、黨が共產主義建設のそれぞれの段階で、共產主義建設のあゆみ全體の中で提起された諸任務の連鎖の中から、その主要な環を區分するということになる。一九二六—二九年におけるこのような主要な環は、國の工業化をめざす闘いであつたし、一九三〇—三四における主要な環は農業集團化のための闘いであつた。一九三五—三七年になると、黨の關心は社會主義建設の完成、ならびにソ同盟憲法の作成と採擇に集中された。これらの主要な環は、共產主義建設を保障するという黨の任務から出發したものであり、國の客觀的な要求を反映していた。そのとまどきに前面にあらわれる「主要な環」と一致した黨史の時代區分は完全に法則的であるといえる。

しかし、國の歷史の時代區分にあたつては、「主要な環」の原則では不充分である。ベルヒンとキムは、國の歷史の時代區分の基礎には、基本的には、生產方法の完結した發展段階がよこたわつていなければならないとのべ、そうであるとすれば、社會主義的工業化の時期の最初の段階をたにすぎない一九二六—二九年をソ同盟における工業化の時期と區分してしまうことはできない、と主張した。一九二六—二九年には、社會主義的工業化という困難な任務のうちの一つ、すなわち重工業の建設手段を蓄積するという任務が基本的に解決されたにすぎない。工業化そのものの任務は、一九二八—三二年の第一次五ケ年計畫を遂行する過程で解決されたのであり、それは窮極的には第二次、第三次の五ケ年計畫にもちこされたのである。

「ソヴェト社會の歷史は、まず第一に社會主義生產方法の創設、勝利、發展の歷史である。したがつて、その基本的な段階は、生產方法の形成と發展の客觀的過程と照應し、またあれこれの時期のなかでこの過程の特殊性と照應して設定されなければならない」ベルヒンとキムは、こう主張したのち、ソヴェト社會の歷史を資本主義から社會主義への移行の時代、と社會主義から共產主義への漸次的移行の時代とに大きく區分した。

この資本主義から社會主義への移行の時代は、さらに一、社會主義の經濟的土台の建設をめざす闘爭の段階、二、基本的に社會主義建設の終了した段階、の二つの段階に區分される。この二つの段階への區分は、社會主義革命の基本的任務を強調するから重要であるばかりでなく、二十年の過渡期のあいだにおこつた一つの社會狀態から他の社會狀態への飛躍、すなわち社

會主義の經濟的土台の建設がこの區分を必然にするのである。

この第一の段階、すなわち社會主義の經濟的土台の建設をめざす闘爭の段階（一九一七―三二年）は、論文では、社會主義の經濟的土台の建設を可能にした三つの基本的任務に照應して、つぎの三つの時期、一、ソ同盟における社會主義革命と國内戦の勝利の時期（一九一七―二〇年）、二、國民經濟の復興の時期（一九二一―二六年、三、社會主義の經濟的土台の發展的建設の時期（一九二七―三二年）に區分されている。

第一の時期は、プロレタリアート獨裁を樹立し、照應の法則をよりどころとして社會主義生産方法をうちたてた時期である。國内戦爭という形をとつた、もつともはげしい階級闘爭の中でおこなわれた工業の國有化は、一九一七年一一月にはじまり一九一八―二〇年のあいだに實現されるが、この戦爭の過程全體が國内戦爭の最高の形態である社會主義革命とはなれがたく結びついて發展し、ソヴェト權力の運命とロシアの社會主義的發展の性格を決定したのであつて、論文ではこの時期は國の歴史の完全な一時期として考察されなければならない、とされている。

第二の時期は、ふつう一九二五年までと考えられてきたが、ベルヒンとキムによれば、一九二六年とする方がもつとも正確である。ソ同盟の工業が戦前水準に復したのは一九二六年九月であるが、運輸部門などいくつかの部門では、まだ戦前水準に達していなかつたのである。

第三の時期の初年は、したがつて一九二七年になる。この時期に社會主義工業化政策の實現に着手し、第一次五ケ年計畫の末年には決定的な成功をかちえることができた。またこの時期に、社會主義革命のもつとも基本的な任務である農業の社會主義的再建に大成功をおさめ、コルホーズ農民をソヴェト權力の農村における支柱とすることができた。こうして、この時期に「都市と農村の資本主義的分子は粉碎され、社會主義の經濟的土台が建設され、ソ同盟における社會主義の勝利は保證された」のである。

註、ソ同盟共産黨中央委員會決定・決議集、七二五ページ

資本主義から社會主義への移行の時代の最後の時期は一九三三―三六年である。この時期に、國民經濟全體の技術的再建と農業集團化を完成して單一の社會主義經濟制度を確立し、社會主義の經濟法則の作用範圍を擴大し、資本主義的要素をうみ出す土台を一掃し、都市と農村、精神勞働と肉體勞働との對立を一掃し、さいごに土台と完全に照應する上部構造を建設して、ソヴェト國民の物質的、文化的生活を急速に向上させ、社會主義の建設を基本的に完成した。

一九三六年のソ同盟憲法では、資本主義から社會主義への移行の時代の完成と、あたらしく社會主義から共産主義への漸次的移行の開始がうたわれている。論文では、この漸次的移行の

時代は、つぎの四つの自立した時期に區分されている。

第一の時期（一九三七―四一年）。漸次的移行の時代をひらくとともに、社會主義の建設が完成した時期。

第二の時期（一九四一―四五年）。大祖國戰爭の時期。

第三の時期（一九四六―五〇年）。國民經濟の戰後の復興といつそうの發展の時期。

第四の時期（一九五一年以降）。社會主義經濟のいつそうの發展と國民の物質的、文化的生活の根本的な高揚をめざす鬪爭の時期。

この時期はさらにその內部で、ソヴェト國民が解決した任務と照應して一定の段階に區分されなければならない。

三

このイ・ペ・ペ・ルヒンとエムペ・キムの論文は、ソ同盟科學院研究所ソヴェト社會史部會の學術會議で審議され、二日にわたつて活發な討論の對象となつた。

ユ・ア・ポリヤコフは、時代區分についての機械的な態度に反對して、ペルヒンとキムの論文の積極的な意義を評價したが、同時に、論證の不十分であることを指摘した。歷史家はただ生產方法の發展を考えるだけでなく、たとえば大祖國戰爭の時期のように、生產方法を變えないとはいえ、ひとつひとつの歷史的段階では大きくうかび上がるいくつかの要因を考慮にいれなければならない。

ポリヤコフは、干涉戰爭と國內戰爭の時期を獨立した二つの時期にわけ、またソヴェト社會の歷史を十月革命から祖國戰爭のはじめまで、祖國戰爭の時期、戰後の建設の時期に三區分するよう提案した。

ペ・ゲ・ソフイノフは、論文における時期、段階、時代という術語の使用が不正確であることを批判したが、また、國內戰爭の最高の形態であるとはいえ、資本主義制度打倒のためにとられ、ソヴェト權力の勝利に終つた十月武裝蜂起の形態は、白衞軍の反革命に煽動され、外國帝國主義者に支援された國內戰爭の形態とは異なるのであつて、十月革命と國內戰爭を一つの時期に區分するのは、歷史的事實からみても、理論的にみても根據が薄弱であると指摘した。

エ・ペ・ゲンキナは、黨小史はソ同盟の歷史の科學的基礎をもつているが、一九三七年で終つており、その後の段階の時代區分の必要がおこつてきたのはきわめて當然であつた、とのべた。生活そのものが、あたらしい歷史的過程の一般化、したがつてその時代區分を要求して、このような問題を提起したのである。

ゲンキナはまた、論文ではソヴェト社會史の出發點が正確にすえられていないために十月革命が後景にひきさがつてしまつた、ブルジョア革命を社會主義に轉化する過程はきりはなされ

てはならないと批判した。

ヴェ・ペ・ダニロフも審議された論文の積極的意義を評價し、上部構造の歴史の時代區分を國民經濟の發展史に機械的にうつしかえてはならない、と強調した。論文では時代區分の基礎に社會發展の内的要因が正しくすえられている。また個々の段階區分の規準に選定されたもの、すなわち社會主義生產方法の定式化と客觀的發展過程も正しい。だが殘念なことに要因と要因との相互作用をあきらかにすることに失敗した、とのべた。

ダニロフによれば、論文では十月革命に四敵する意義をもつたあらゆる分野における社會主義の勝利とその基本的な環—農業の全面的集團化と階級としてのクラークの絶滅がぼやかされている。この時期の最終年は都市と農村の社會主義的生產關係が勝利し、「誰が誰を」という問題が解決された一九三二年におかれなければならない。

ユ・エス・ボリソフは、社會史の時代區分では社會發展の完結した段階から基本的には出發する必要があることを主張して、現象を土台から觀察するだけでなく、上部構造からも觀察しなければならないとのべたのち、論文が戰後五ヵ年計畫の年代的わくを機械的におきかえているのはまちがつていると批判した。ボリソフによれば、ドイツに勝利した一九四五年五月九日から五ヶ年計畫のはじまつた翌年二月までの九ヵ月間を戰爭期にふくめてはならないから、戰後の復興期はあきらかに一九四五年からとされなければならないし、ソヴェト社會發展のうえでどんな質的な發展もおこらなかつた一九五一年（第五次五ヵ年計畫の初年）をあたらしい時期の出發點と考えるのは根據がよわい。

デ・ア・バエフスキーは、生產方法の發展はいうまでもなく時代區分のさいの原則であるが、社會の歴史は同時に財貨の生產者の歴史、つまり勤勞者の歴史であり、國の革命的改造の段階が時代區分の基礎にすえられなければならない、こう理解すれば、勤勞者の積極な役割を反映するから、十月革命の遂行期と準備期を分離しなくなろう、とのべた。

オ・エヌ・チャアダエヴァは、社會主義建設の各段階にわたつて黨の指導的役割をあきらかにすると同時に、歴史的過程をもつと一般化された多面的な形であきらかにすることがいかに重要であるかということをのべた。レーニンは社會主義建設の目前の任務を解決するために勞働者の力を結集したが、同時に來るべき農業集團化のために、その理論的基礎としての協同組合プランをつくりあげた。黨はつねに遠い前方を見ていることを考慮しなければならない、と注意している。

チャアダエヴァは、工業化と農業集團化を分離することに反對し、論文を支持したが、社會主義建設の境界線を一九三六年にひいたのはまちがつていると考えている。彼の見解では、そ

れは一九三六年に採擇された憲法が實際に効力をもつ一九三八年であつた。

イ・イ・ミンツも、黨史でなされている時代區分が一九三八年で終つており、しかもこの時代區分が、考慮されるテーマとかかわりなく、ドグマチックに利用されているので、この論文は時宜をえたものであつた、とのべた。また彼は、十月革命と國内戰を一つの時期に區分する提案には反對し、工業化の時期と農業集團化の時期を一つにする提案は議論の餘地があるとしている。さいごに、第二の時代の區分を目論んだ論文のこころみはもつとも貴重であるが、その第一期を名稱も年代的わくも五カ年計畫のそれと同じにしていることに反對した。

さいごに、ア・ヴェ・ミトロファノヴァは、共産主義への漸次的移行の時期の初年を一九三八年にするよう提案した。それは第三次五カ年計畫がこの年にはじまつたからではなく、第二次五カ年計畫（一九三三―三七年）で社會の物質的生活の發展におけるもつとも重要な過程が完成し、單一の社會主義經濟制度がつくりだされたからである。だから第一八回黨大會では、九三八年にソ同盟は社會主義から共産主義への漸次的移行の時代に入つたと宣言することができたのである。

ソ同盟社會史の時代區分の問題は、このように一致した解決をみることはできなかつたが、「社會主義期におけるソ同盟史」の編纂にさいして、もう一度審議することがきめられ、かなりの成果をおさめることができた。第二〇回ソ同盟共産黨大會では、ミコヤンによつて「黨小史」にたいする態度の反省が求められ、一九三八年以降の部にたいする要望がのべられたと傳えられるが、それはこうした背景もあつたのである。